

公共図書館における貸出利用の実態 —江東区立図書館の貸出データの分析—

五十嵐 智哉

図書館のコレクションは、図書館がどのようなサービスを提供するにあたって、その基盤となるものである。利用者の要求に十分に答えられるようにコレクション構築を行うために、利用者の要求を知る必要がある。そのための代表的な手法として、館外貸出データを用いた調査が考えられる。公共図書館における館外貸出データの調査は、前野幸治による行橋市立図書館の調査（1999）があるが、そのような調査は少なく、また数少ない調査も調査から年月を経てしまっている。近年、図書館の資料費の減少により、選書の重要性がより高くなってきている。さらに膨大な統計データを分析し、それをサービスの改善に活用していくことが、社会的にも求められている。そこで、本研究では、公共図書館の膨大な貸出データを分析することで、これまであまり把握されてこなかった住民の貸出利用の実態を明らかにすることを目的とする。これにより、現代の公共図書館における資料選択の基盤を量的な側面から提示できる。

本研究では、2014年4月から2017年3月までの江東区立図書館の貸出データ 19,879,798 件を対象に分析を行った。具体的には、第一に、NDC 第2次区分で蔵書回転率を算出した。第二に、蔵書回転率を基礎として図書館がある地域の特徴と貸出利用の関連を調査した。第三に、江東区立図書館内での相互貸借の件数を求めた。最後に、個々の資料に注目し、貸出件数の多い資料や、経過年ごとの資料の貸出利用の差を分析した。

調査の結果、一般書において、59（家政学・生活科学）と29（地理・地誌・紀行）の蔵書回転率が高いことが明らかになった。これらの分類は約20年前の調査でも蔵書回転率が高く、よく利用される領域は変わっていないといえる。また、近年オフィスが急増している豊洲では33（経済）の蔵書回転率が高くなるなど、地域の特徴と関連する分類も明らかになった。このことから公共図書館の周辺の住民や環境も考慮したうえで、コレクションを構築することがより求められると考えられる。

江東区立図書館内での相互貸借件数は、蔵書数との関係を分析したが、明確な特徴はみられなかった。館内における相互貸借には複数の要因が考えられるため、単純に蔵書量のみで関係性を見ることは難しかったと考えられる。

最後に、個々の資料に着目すると、文芸書などの話題となった図書は、受入後すぐの利用が多く、年月を経ると貸出の量が減少するのに対し、絵本などの昔から親しまれていると考えられる図書は、受入後期間を経ても依然利用されていた。さらに受入後年月が長い資料では、実用書や入門書も相対的な利用量が増加していた。特定の分野において、実生活や学習に有用だと考えられている図書もまた、長い間安定して利用されていると推察される。

（指導教員 小泉 公乃）